

英語多読の取り組みとその効果

長森 清

はじめに

近年、英語教育において多読に対する関心が高まっている。英語多読は短めでやさしめの図書を大量に読むことを推奨する英語学習・教育方法(Day & Bamford, 1998; ウェアリング・高橋, 2000)であり, extensive reading, free voluntary reading (Krashen, 2004)そしてsustained silent reading (Pilgreen, 2000)と呼ばれるものを含む。多読に対する主な目的は、インプット量を増やすことで、リーディング能力をはじめとする英語力を伸ばすことにある。

多読の直接的あるいは間接的な効果については、さまざまな研究がなされている。リーディングスピードの向上(Robb & Susser, 1998; Mason and Krashen, 1996), リーディングの流暢さ(Iwahori, 2008; Day & Bamford, 1998; Krashen, 2004)だけでなく、多読を行うことにより語彙や用法が付随的に獲得される(Day, Omura & Hiramatsu, 1991; Nation, 1997; Waring & Takaki 2003; Pigada & Schmitt, 2006; Kweon & Kim, 2008; Waring, 2009)ことが実証されている。さらには多読の情緒的における効用もわかってきている。多読を行うことで、英語に対してより積極的に肯定的な意識・態度をもつことが報告(Krashen, 2004; Day & Bamford, 1998; Takase, 2008, 2009)されている。

本校における英語多読の取り組み

昨年度から、本校においても英語多読を導入し、多読用図書をレベル別そして系統的に完備している。英語多読を導入した背景には、2つの理由がある。まずは英語の長文が苦手、または苦手意識をもっている生徒が多かったからだ。そのような生徒は英文を読むことに不慣れで、英語に接する絶対量が不足している。次に、1語1語または1文1文の意味を

正確に取ろうとするがために、英文を読むのに長時間かかる生徒が多かったからである。「読む」とこと「訳す」ことはまったく別の作業であり、直読直解の訓練が必要である。また、英語の得意な生徒と不得意な生徒の差があるため、同じ教材で同じことを教えていく一斉授業の形式では、双方の生徒のためにならないと考え、多読を導入するに至った。

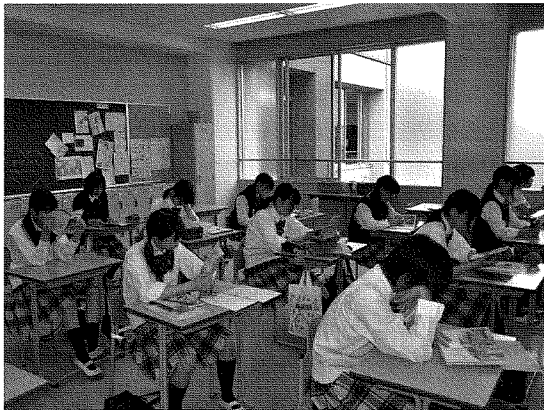
英語多読の目標として、1つめに、英文に慣れることで、読まされているという受身的な姿勢から、生徒が自発的に英文を読もうという態度を養う。2つめに、多くの英文に触れることで、インプット量を増やし、英文の構造や自然な語の結びつき(コロケーション)などの文法力や語彙力を身につけ、リーディング力を総合的に伸ばし、英語の本を読めるという自信をつけさせる。

英語多読における留意点として、SSS(Start with Simple Stories)の多読方式を採用し、辞書を引かない、わからないところはとばす、つまらなければやめるなど、生徒の気持ちの負担をかけないで、継続が可能なように心がける。生徒が1ページ中の単語を90～98%知っていれば、「すらすら」読むことができるため、大学入試における「速読」に必要な速度を体に慣れさせるという狙いもある。これが多読の「スイート・スポット」で、すらすら読めれば楽しく感じ、楽しければ長続きし、継続できれば英語に触れる絶対量が増し、リーディングスピードと自然な読書向上の訓練となり、多読の効果を期待できる。物語を中心に生徒の興味・関心に合わせ、さまざまな分野の洋書を用意し、生徒の英語力を考え、レベル別に約180冊の図書をそろえているので、飽きずに続けていけるようにしている。また、辞書を引かないことで、未知語に出会っても立ち止まらず、コンテキストから意味を推測するという練習になる。生徒によっては、未知語を書き出しておいて、本を読み終わってから辞書を引い

て正しい意味を確認するなど、語彙数を増やすための努力をする生徒もいる。

一方、難しすぎる本を選んでしまうと、理解度が低く、遅くしか読めず、読書が楽しめず、やる気が下がるという、悪循環に陥ってしまうため、教師がどの本が最も適切か、アドバイスをすることが重要になる。

本校では授業時間内で、また全校で実施することが難しく、高校1、2年生の一貫コース及び特進コースの生徒約40名が朝学習として週2回、8時から8時15分を英語読書の時間として行っている。1週間に30分を英語読書の時間として、1か月に120分を生徒自らが主体となって英文を読んでいる。簡単な英語の本などは、速い生徒だと10分程度で1冊読み終わる。そして、その本のタイトル、語数、感想などを読書記録手帳に記入している。自分のレベルに合わせて、できるだけたくさんの英語や物語に触れ、英語力と教養を身につけ、英語多読の取り組みを通して、洋書を読む楽しさを実感している。

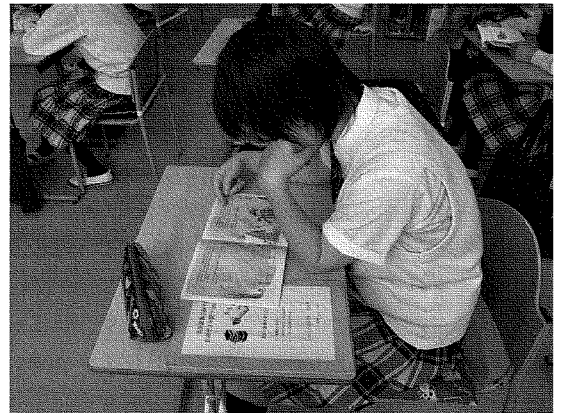


もともと本を読む習慣がない生徒にとっては「読む」こと自体に意味を見出せなかったり、苦痛を感じる生徒もいる。そこで、読書の動機づけの1つとして読書感想文を課し、Cengage Learning主催の「英語ジュニア読書大会」に応募した。参加者1,030名の中から、日本語感想文の部で入選することができ、入選者はもちろん、他の生徒も以前より朝読書に対するモチベーションが上がったようである。

今後の課題と展望

多読用図書を増やし、自発的な多読の継続を促していく予定である。それに加えて、速読や多聴を取り入れ、多読と組み合わせた指導を計画している。その一環として生徒には共通の本として、数研 OXFORD セレクションの DOMINOES シリーズや BOOKWORMS シリーズを持たせ、活用したいと考えている。これらのシリーズはワークブックにおける確認と、CDによる多聴ができるので、読んだら読みっぱなしになることがなく、多読をより効果的にすることができる。

また、昨年度からスコア型英語検定の GTEC も導入し、リーディング、リスニング、ライティングの3つのスキルを計測した。リーディング部門では全国平均スコアが150に対し、本校生徒の平均スコアが156であった。1分間に読むことができる語数を表した WPM (Words per Minutes) を計ることもでき、大学入試問題においては WPM 90 語程度が十分な速度と言われているが、本校では WPM 100 語以上の生徒もいる。今後、3年間の生徒が記入している読書記録手帳のデータを基に英語力の相関性を調べるのが課題である。



(村田学園小石川女子中学校・
村田女子高等学校教諭)